

2026/1/31

リトルハウス通信

年が明けてすぐの1月10日、当法人にて職員の知見を広げるべく、久々の勉強会を開催しました。今回のリトルハウス通信はその勉強会の模様と感想を書きたいと思います。

今回の勉強会は、長年にわたってソーシャルワークの観点からアディクション（依存症）問題について研究と実践を重ねてこられた稗田里香先生にお越し頂き、示唆に富んだ講義とワークを受けることができました。そこでアルコールや薬物等々のアディクション状態に至るまでの経緯や、その苦しみの中にいる当事者に対し、支援者にはどのような寄り添いが必要とされるか、そして実践の支援において役立つノウハウも学ぶことができました。

その中で、私（というより勉強会の参加者全員）が強いインパクトを受けたのは、「喪失と孤立のシュミレーション」（通称：アディクション体験ツアー）というワークでした。このワークの特筆すべき点は、机上で付箋を使うだけのごくシンプルな構造のワークでありながら、アディクション問題によって発生する当事者の「喪失と孤立」のメカニズムが疑似的に体感できる点にあります。このワークではっきり理解できるのは、アディクションという現象が「喪失と孤立」の中で生まれ、そこに追い打ちをかけるように新たな「喪失と孤立」が静かに忍び寄ってくるような連鎖のメカニズムだということです。

この「喪失と孤立」の行きつく先が、よく言われる「底つき」の状況なのでしょう。実際にこのワークでは、完全な底つきの「一步手前」までのプロセスを思考しながら疑似的に体感し、実はそのプロセスは「スピリチュアルペイン」即ち「存在の痛み（自己否定や生きる価値の喪失等）」の経路であるという理解にまでたどり着きます。

私たち支援者は、クライアントが現在抱えている生活上の「課題」にばかりフォーカスして支援の方策を考えがちです。もちろんそれは決して間違いではありません。しかしその「課題」によって引き起こされた当事者の「痛み」、あるいは「課題」が生まれるきっかけとなった「痛み」に近づくこと、共感することに困難さを感じることもまた事実です。今回の勉強会、そしてワークは、当事者の「痛み」を我々が少しでも知ろうと決心する、小さな、しかし大きなきっかけになったと感じています。

以前稗田先生から「底つきになるもっと早い段階で、当事者への支援体制を構築することが大切」である旨教えて頂きました。この言葉は即ち「早い段階で、当事者の痛みに関心を持てることができたなら、底に着くよりもずっと早い段階で、喪失と孤立から抜け出す可能性を見出せるのではないか」という意味に捉えることもできます。今回の勉強会を通して「痛み」というものを大切なキーワードにして支援を考えていきたいと思った次第です。（鈴木）

■参考文献 稗田里香 ソーシャルワーク研究:社会福祉実践の総合研究誌 38 巻 4 号『アルコール依存症者のスピリチュアルペイン：一般医療機関におけるソーシャルワーク実践から』 2013